

Eureka VII

六年制通信 No.29 令和2年12月24日(木)号

自由度を高める

前回の続きのようになりますが、勉強でも仕事でも(学校でも職場でも)やたらとうるさい規則があるのは嫌ですよね。自由に勉強したい、自由に仕事したい、そう思っている人は多いでしょう。私もそうです。自分のことを話して申し訳ないですが…。これをしなさい、それはしてはいけない、そういった指示を受けたくないですね、昔から。教師の仕事は相手が人間、しかも未成年ですからね、一般的な仕事とは違うのかも知れませんが。生産ラインがあるわけでもないし、何がノルマかわからない、自分の仕事がうまくいっているのかさえ分かりにくいものです。特殊なんですかね。でも生徒のために何をすべきか、何をすべきでないか、そんなことはちょっと考えたらわかることだし、自分に対する仕事の期待程度くらいのは、越えて仕事するなんて当然だと若い頃はそう思っていました。人間相手の仕事にマニュアルはないとわかっていてから、自分の体験から日々学んでいくよりなかったですね。さぼろうと思えばいくらでもさぼれる、やろうと思えば際限がない、そんな仕事を選んだという自覚はありましたから。別の職に就いた学生時代の友人からは、忙しいのは幸せなことじゃないかとよく言われました。ですから、こんなに仕事してますよアピールなんて下品なこととはしませんでした。学校の先生は、仕事として考えたら、ありがたいことに自由度が高い方ですよ。私は自由度が高くなると人は正直でいられると思っています。みんなが左というから左へ行くのではなく、自分で考えて右なら右へ左なら左へ行くことができる、それは自分の頭で考え自分の足で立っているということです。仕事の下限も上限も自分で決めることができる、自分の判断で充実した仕事ができる、そんな仕事に君たちも就けるといいですね。

自由な判断で勉強したり仕事したりできる環境は文字通り有り難いことですが、私はその自由さを君たちの学校生活でも求めたいと思います。誰にも強制されず、罰則もなく、それでいて厳格に道徳が守られている、そんな学校生活を体現してほしいと願っています。君たちが紳士と淑女の集団であれば絶対にできると信じています。世の中のルールは少ない方がいいのに、現実はこちらでもかというほど細かいルールがたくさん作られています。それはルールの真意を理解できない愚かな人間がいるからです。悲しい話です。私は漢の高祖の「法三章」が一つの理想だと思っているのですが、これが成り立つには「一人を慎む」という発想が必要だと思っています。人目がなくても、一人きりの時でも、いや、一人だからこそ正しく生きる、これを「一人を慎む」と言います。一人の時、つまり何の強制もなく、誰の目もない時、その時の自分が本当の自分

です。性善説に従えば、そのとき人は正しいことを行えるはずなのですが、これがなかなか難しいのです。そうでなければ、つまり誰もが簡単にできるのであれば「一人を慎みなさい」という言葉が生まれるはずはないのですから。

私は、私に命を与えてくれた何か大きな意思のようなもの、あるいはご先祖様、またはお天道様、そういった私たちを超越したものがいつも私を見ている、そう考えています。そういう考えがいつもギリギリのところで私を救ってくれている気がします。一人のときの私を律してくれるのです。私は倫理観、道徳観の基本にはこの感覚が必要だと思っています。つい自分の利益のためだけに嘘をついてしまう。黙っていればわからないと思ってしまう。他人を蔑んでしまう。人の心は弱く、自分一人の時の行いと他者のいるところでの言動が違ってしまふことがあります。あるいは心の中だけにしろ、非常に悪い嫌なことを考えてしまうこともあるでしょう。しかし、私に命を与えてくれたものには私の全てが見えていると考えれば、そういう方向へ心を動かさずに済むように思うのです。一人を慎むために私はこのように考えています。

さて、今年も年末が来ました。昨年もこの時期に「除日に講を起こす」という話をしました。大晦日に、ある若者が林羅山のところに来て元日から学問を教えてほしいと言うのですが、羅山は「だったら今からやりましょう」と言って大晦日から講義を始めたというエピソードです。そして私は大晦日の朝 7 時に机に向かうと君たちに約束しました。昨年は約束を果たしました。もちろん今年も約束します。元日の朝も勉強します。一緒にいかがですか。1 年生の諸君は初めてですね。頑張りましょう。

「除日に講を起こす」の本当の意味を先輩たちは知っていますから、聞いてみて下さい。

コロナ禍の続く中、年末年始を迎えます。これまで通りの **Educated Action** をお願いします。6 年生の諸君、頑張れよ。自分の本気を自分に見せつけてやれ！

冬休みのおすすめ

・谷崎潤一郎 『文章読本』（中公文庫） など

大変有名な本ですが、私はまだ読んでいませんでした。実は『細雪』も読んでいません。谷崎は『春琴抄』くらいだったのですが、最近になって『谷崎潤一郎犯罪小説集』（集英社文庫）を読んだのです。この中の「途上」が江戸川乱歩の絶賛を受けた短編で、面白かったので、ついでに『文章読本』も読んでみたのです。そしたら嬉しい発見がありましてね。これはもう堂々たる文章論で、「西洋の文章と日本の文章」とか「源氏物語派と非源氏物語派」とか面白いし、古典から現代まで実際の作品からサンプルを取って吟味をしています。その中に志賀直哉の『城の崎にて』がありまして、以前私の考える名文としてこの通信で紹介した蜂の描写がそのまま採録されていたのです。おっ、私の目も谷崎レベルになったかと思ったけれど、しかし私はただ「上手いもんだなあ」と感心しただけなのに対し、谷崎は非常に細かな分析をしています。さすがです。谷崎自身も精緻な描写で有名ですからね。また、芥川龍之介も志賀直哉の描写力を絶賛していたとのこと。

というわけで、この冬は志賀直哉と谷崎潤一郎を読んでみたらいかがでしょう。太宰でもいいですよ。いわゆる文豪と呼ばれる作家にふれる冬休みですね。

BGM は 松崎しげる の 愛のメモリー でした…。